

令和2年9月10日

南の風 362

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

日本女子アンダーカテゴリー（U19～16）の課題の最後になります。

《ディフェンスリバウンド》について私の考えです。

ディフェンスリバウンドについては、指導者によって考え方が違います。粗く言って次の3つに分かれます。

- ①ボックスアウトをしっかりとおこないリバウンドを取る。
- ②自分の相手に身体を当てて、動きを止めて素早くリバウンドに行く。
- ③ボックスアウトはしないで、シュートの落下点を予測してリバウンドに行く。

それぞれのチーム、あるいは指導者の考えがあると思います。どれが正解ということはありません。大切なことは、目的を持って取り組むことです。ディフェンスリバウンドを取る戦略を、チームでどう考えるかです。

リバウンドと言うと、思い出される伝説のチームがあります。

年配のバスケットボールファンなら覚えている方も多いと思います。

辺士名高校の男子バスケットボール部です。1978年の全国高校総体で沖縄県勢初の3位入賞を果たした高校です。何が伝説かということ、このチームオフェンスリバウンドに1人も跳ばないのです。味方のだれかがシュートを打つと、全員一目散にハリーバックしてしまうのです。

サイズが小さかった辺士名高校はチーム戦略として、オフェンスリバウンドを捨て相手の速攻を防ぎ、簡単に得点させないことを第一義としていたのです。現在では考えられない戦略かもしれませんが、当時はたいへん大胆な発想として話題沸騰だったことを覚えています。

まあ、こういうチームと対戦したとすれば、そもそもディフェンスリバウンド云々の話は必要ないと思いますが。

話を戻します。私は、育成年代はボックスアウトをきちんと指導すべきだと思います。ボックスアウトを確実におこなうことで、相手チームのプットバックシュートを確実に減らせると思うからです。

私の考えを述べる前に、定義をしておいた方がよいことがあります。

スクリーンアウトとボックスアウトの違いです。（ブロックアウトという括りの中で、二つに分ける考え方もあります）

「指導者によって言い方が変わるだけではないのかな」という意見や、「オフェンスにコンタクトして動きを封じることは一緒で、チームとして取り組むのがボックスアウトで一人ひとりがおこなうのをスクリーンアウトと呼ぶのではないか」など指導者によってそれぞれ考えがあると思います。

私は2番目の方の考えに近いです。『スクリーンアウトは個々がおこなうやり方を示し、ボックスアウトは、チームでオフェンスにそれぞれの内側には絶対に入れないで守ること』と定義して指導しています。

具体的なスクリーンアウトのやり方については次号にします。